

メディアリテラシーを身につけ、自分の意見を豊かに表現できる生徒の育成 ～各教科や総合的な学習の時間における NIE の実践から～

延岡市立土々呂中学校
教諭 片山 弘喜

1 はじめに

インターネットでは、数多くの情報が流れている。各新聞社や通信社から発信されるニュースも膨大で、検索をすれば自分の知りたい情報を簡単に手に入れることのできる時代となった。新聞離れは避けようのない現実である。しかし、「一覧性」や「記録性」などの特性は新聞の魅力であり、新聞活用による授業の教育的効果は依然として高い。平成 23 年 4 月から、小学校の学習指導要領において新聞活用が明記され、中学校においても来年度から実施されることとなった。

そこで、本校では、各教科や総合的な学習の時間に NIE を取り入れ、全職員による新聞活用を行った。

2 学校の概要

本校は全校生徒が 558 名の比較的大きな規模の学校である。延岡市の南部に位置し、豊かな自然に囲まれた環境の中にある。平成 22 年度より NIE 実践校の指定を受け、本年度が 2 年目である。学校では 2 紙の新聞を購読しているが、教材として用いられることは少ない。延岡市では、宮崎県支部新聞公正取引協議会による「すべての教室へ新聞を」運動が実施されており、各教室に毎日 1 部の新聞が配達されている。教室に新聞があることに違和感を感じている生徒は少なく、興味のある記事を読む生徒の姿が見られるようになってきた。

NIE 実践校による新聞購読は 6 月から始めた。「すべての教室へ新聞を」運動による新聞も考慮し、以下の通りに新聞購読を行った。

- 朝日新聞・・・12 月～3 月
- 毎日新聞・・・9 月～12 月
- 読売新聞・・・6 月～7 月、9 月～10 月
- 日本経済新聞・・・6 月～7 月、11 月、1 月
- 西日本新聞・・・6 月～7 月、1 月～2 月
- 宮崎日日新聞・・・9 月～11 月

3 実践内容

本年度は、各教科や総合的な学習の時間などにおいて全学年の生徒を対象に NIE を取り入れた。また、本校の主題研究の研究内容として NIE に取り組んだ。実践内容は次のとおりである。

- (1) 各教科における新聞活用
- (2) 総合的な学習の時間における NIE の活用

4 取組の実際

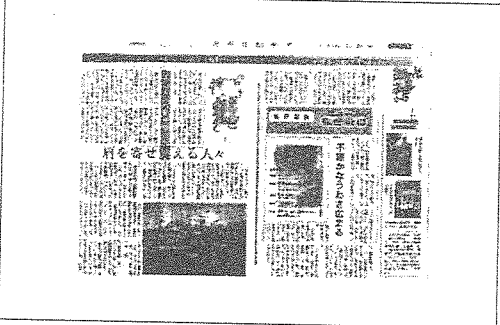
(1) 各教科における新聞活用

本校は、平成22年度からの2年間、日本新聞協会よりNIE実践校として指定された。また、延岡市内の小中学校においては、「すべての教室へ新聞を」運動が実施されており、平日に各クラス1紙の新聞が配達されている。そこで、本年度は、各教科等の授業において新聞を活用した。原則として、各単元において1回、活用できるところで新聞記事を使用することとした。また、その取組について集約し、今後の新聞活用について検討した。各教科等における取組の具体例は以下の通りである。(資料1、2)

(資料 25)

教科	冊数	学年	第1学年	単元など	授業の導入

1 活用した新聞記事 (高崎日日新聞 平成 23 年 5 月 12 付 12 面)



2 活用法

キッズジャーナル本欄版に掲載されている新聞記事を、新しい学習1の単元「話し方はどうか」におけるスピーチ (1分間で300字程度) 練習で次のように活用した

- 1 導入において実際の新聞を見せた後、生徒へ縮小した新聞記事のコピーを配布する。
- 2 スピーチ用に使う新聞記事を、生徒に紹介し、読む順番を交代させてスピーチの練習をさせる。
- 3 スピーチの発表で評価をする。(300字程度の原稿を1分間程度で読むことができるか。)

3 成果と課題

(1) 成果

- ・ 教科書の中にある文章だけでなく、新聞記事を活用することで、表現の幅が広がる。
- ・ 子ども向けに作られた新聞記事は難しい言葉に対して意味が掲載されているため、言葉に対する興味・関心を引き出すことができる。

(2) 課題

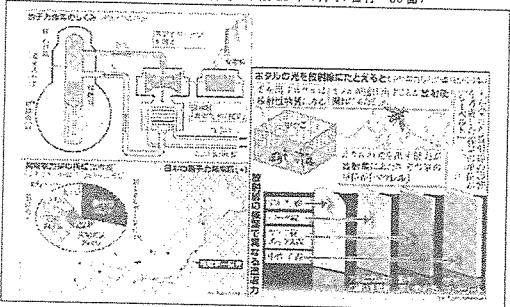
- ・ 普段から新聞を活用していないので、生徒の興味・関心を引き出すことはできるが、言語に関する力は定着していない。

資料1：国語科での活用例

(資料 27)

教科	理科	学年	第2学年	単元など	授業の導入

1 活用した新聞記事 (朝日新聞 平成 23 年 4 月 17 日付 35 面)



2 活用法

- (1) 単元の導入として活用
 - ・ 単元の導入として、生徒が学習内容に興味・関心を持てるように、学習に関連のある記事を取り上げて紹介する。
- (2) 関連内容の調べ学習
 - ・ 学習内容で、疑問に思ったことや興味のある内容について、調べ学習を行う。授業中や課外課題で、学習内容に関連のある記事を自分たちで調べ、分かったことについて、自分なりの考えや感想をまとめさせる。

3 成果と課題

(1) 成果

- ・ 時事問題を扱うことで、学習内容に興味・関心を持つことができた。
- ・ 学習する内容が身近にあることを理解し、学習意欲に結びつけることができた。

(2) 課題

- ・ 新聞記事の紹介にしても、普段新聞の読む習慣のない生徒には、興味・関心が薄かった。
- ・ 新聞記事を教達するのに時間がかかる。
- ・ 調べ学習を行うとできる生徒とできない生徒との差があり、非常に時間がかかってしまう生徒が見られる。また、それをもとにして自分の考えをまとめることも難しいようである。

資料2：理科での活用例

(2) 総合的な学習の時間における NIE の活用

本年度は、全学年の総合的な学習の時間でNIEを展開した。その中でも、特に第1学年の授業において、様々な取組を行った。

① 取組の内容

第1学年の総合的な学習の時間は、NIEと進路学習を中心に計画した。NIEは1学期から2学期に行うこととし、次の活動に取り組んだ。

- ・ NIE オリエンテーション
- ・ 新聞スクラップ
- ・ スクラップ新聞 (コラージュ)
- ・ 文化祭速報新聞作成
- ・ 壁新聞作成

以上の活動から、「NIE オリエンテーション」「新聞スクラップ」「文化祭速報新聞」について報告する。

ア NIE オリエンテーション

(7) 総合的な学習の時間の概要説明

総合的な学習の時間のはじめに、年間を通して行う活動について説明した。その中でNIEについても説明をした。具体的には

- ・ NIE の概要
 - ・ 新聞の基礎
- の2点であった。

(4) 新聞記者の出前授業

新聞を活用した授業では、新聞というメディアの信頼性を知らせたり、新聞そのものへの抵抗感をなくしたりすることが欠かせない。これらを解決するために、新聞記者など新聞に関わる方の話を聞くことが必要である。

そこで、第1学年の生徒を対象に、NIE オリエンテーションとして記者の出前授業を実施した。

(資料3) 以下の3点をねらいとして設定した。

- 新聞に関わる方の話を聞くことで、「新聞」に興味をもたせる。
- NIE の概要を知る。
- 新聞社で働く方の話を聞き、自分の進路選択に関心をもたせる。(キャリア教育)

宮崎県NIE推進協議会に依頼し、できるだけ多くの記者に来校していただきたい旨を伝えたところ、以下の4名が講師として派遣された。

- ・ 読売新聞社 千田 伸二 宮崎支局長
- ・ 朝日新聞社 阿部 裕明 宮崎総局長
- ・ 毎日新聞社 石田 宗久 宮崎支局記者
- ・ 宮崎日日新聞社 西木戸 賢治 読者室長

講師となる新聞記者の方々とは事前に打ち合わせを行った。読売と朝日は2クラスずつ、他の2社は1クラスずつの生徒を対象とした。生徒を対象に、「新聞の魅力」、「新聞を作る上での苦労話」、「新聞に関わる活動」、「新聞で学べること」の4点を中心に講話をいただいた。

イ 新聞スクラップ

新聞には、一覧性や詳報性、記録性などの様々な特性がある。これらの特性を生徒に教えるのではなく、生徒自身に気づかせるために、新聞スクラップの活動を行った。



資料3：出前授業の記事

(『宮崎日日新聞』平成23年5月28日付
25面)

NIE 実践校における新聞提供は6紙×4カ月分である。この新聞だけでは学年全体の生徒に、十分な量の新聞を与えることができない。そこで、各新聞社が設定している教材用価格で生徒数分の新聞を購入した。今年度は宮崎日日新聞を選択した。事務職員と検討し、180部を3時間分準備することができた。

活動の前に、以下の点に注意するよう指示した。

- ・ 自分が興味をもった記事を切り抜くこと。
- ・ 記事の裏面にも記事があり、切り抜く際には注意をすること。
- ・ スクラップした記事は事前に準備したクリアフォルダに保管すること。

なお、この様子は、日本新聞協会が発行する「NIE ニュース」第64号の「NIE でいきいき」のコーナーで紹介された。(資料4)



資料4 : 『NIE ニュース』第64号「NIE でいきいき」

エ 文化祭速報新聞作成

最近の若者に見られる活字離れを防ぐために、NIEによる新聞活用が行われている。中学生で新聞をじっくりと読む生徒は少ない。そもそも、新聞の読み方を学校の教育活動で教えることはほとんどなく、各々の経験や感覚で新聞を読んでいるのが現状である。

そこで、新聞をきちんと読めるようになるために、新聞を作成させることを考えた。実際の新聞の形に近いものを作成することで、新聞の記事の書き方や流し方、見出しの効果などを知ることができる。このことにより、実際の新聞への抵抗感をなくそうとした。

新聞の特性には「速報性」がある。しかし、インターネットの広がりにより、その特性が薄れつつある。新聞社は重大な出来事や事件があったときには号外を発行する。号外を発行するように、その日の出来事を新聞形式にまとめて発行すれば、速報性を知る機会となる。

以上をふまえて、設定されている総合的な学習の時間を使い、文化祭の速報新聞を作成させた。

(ア) 活動の計画

速報新聞の作成にあたって、各クラス3～4名の希望者を募りグループを編成した。そのグループを2班に分け、文化祭の前半と後半のそれぞれの新聞を作成させた。

具体的な計画については、次の表1のとおりである。

表1：速報新聞作成における活動計画

平成23年度 第1学年 総合的な学習の時間(文化祭:速報新聞) 計画							
月	日	曜日	校時	活動内容	対象生徒	活動場所	備考
9	30	金	5	グループ編成、班編成	速報新聞班	教室	総合
			6				総合
	7	金	5	紙面の検討、レイアウト決定			総合
			6				総合
10	14	金	5	記事の作成(予定稿) 記事の入力(テキスト)	速報新聞班	パソコン室 (パソコンが使える教室)	総合
							6
	17	月	6				総合・中間テスト
10	25	火	5	合唱コンクール学年リハーサル	学年生徒全員	体育館	総合
			6				総合
	27	木	5	見出しの検討	速報新聞班	パソコン室 教室	総合
			6				総合
	28	金	5	紙面の確認 仮印刷と校正		教室 パソコン室	総合
			6				総合
29	土	3	文化祭前日準備(別途計画)			準備	
		4	準備				
		5	発表リハーサル 当日の動きの確認	1学年生徒全員	体育館	総合	
		6	総合				
30	日		文化祭				

(イ) 見出しの検討 (記者の出前授業)

新聞作成において、最も重要なものが記事の見出しである。見出しについては事前に簡単な説明を行っていたが、効果的な見出しを作らせることができなかった。そこで、新聞作成における留意事項や見出しの作り方について、新聞記者の出前授業を行った。講師は宮崎県 NIE 推進協議会に依頼し、宮崎日日新聞社読者室員の小川清一郎氏が来校した。

(資料5)

授業では、新聞作成上の留意点だけではなく、見出しの効果的なつけ方や記事の流し方、写真の掲載の仕方などを具体的に説明された。



資料5：新聞作成の記事 (『宮崎日日新聞』平成23年10月29日22面)

(ウ) 発行

速報新聞は2号作成し、すべてのクラスに届けた。また、1号については、約200部を体育館受付で保護者に配布した。(資料6、7)

(エ) 生徒の感想

- ・ 班の人と協力して、1枚の新聞を作り上げた時に気持ち良かった。もっと活動時間を延ばしてほしい。
- ・ もっと新聞について知りたいと思った。新聞の作り方が分かった。文の構成の仕方がわかって、作文が書きやすくなった。
- ・ 難しい仕事だったけど、友達と協力して取り組むことができたし、新聞についてたくさんを知りました。来年も、もしすることになったら、今年以上のものをつくりたいです。
- ・ 新聞に関わる仕事をしている人のお話は、自分たちの知らないこともいろいろあってためになると思うので、このような授業は続けてほしいです。

5 成果と課題

(1) 各教科での新聞活用

① 成果

- 全職員が学校に配達されている新聞を活用することを意識して教育活動を進めることで、新たな教材開発を行うことができた。
- 新聞を活用することで、教科書にはない最新の情報を提示することができ、生徒の意欲を高めることができた。

② 課題

- 新聞記事の活用について、授業で使いたい記事を使いたい時に使用することが難しい。スクラップや新聞の保管など、データベース化する必要がある。
- 過去の新聞記事を使いたい時に記事のないことが多いため、各新聞社や宮崎県 NIE 推進協議会との連携が欠かせない。
- 新聞記事を使うことが目的になると、教科の目標が十分に達成されないことがあるため、「使える時に使う」という考え方で新聞を活用することが重要である。

(3) 総合的な学習の時間における NIE

① 成果

- 活動内容を新聞形式でまとめることで、表現力の高まりが見られた。表現力については数値で測ることが難しいが、宮崎日日新聞に生徒の作文を投稿したところ、4名のものが掲載された。
- 多くの生徒は NIE の活動に意欲的に取り組んでいた。表現活動に関心をもたせ、表現の方法を多く覚えることで、今後の学習活動への応用が可能である。

② 課題

- 計画や準備が煩雑である。今後も今年度同様に活動を進めるのであれば、講師依頼の方法や活動計画、準備するものについて整理し、引き継ぐ必要がある。
- 新聞の活用や保管について、学校全体で共通した取組が必要である。生徒に身につけさせたい能力や知識を共通理解し、全職員による実践が必要である。